

妻の病

— レビー小体型認知症 —

一人の医師と、認知症の日々を生きる妻との10年間に及ぶ“いのち”を巡る物語。

Life is like a Dream, isn't it?

「生きなきゃ...
ふたりでよう頑張ったと思う。」
「うん、生きなきゃ。」



Life is like a
Dream, isn't it?
まるで夢のようだね。
ゆめのほとり

— 認知症グループホーム 福寿荘 —

でもね
心は全部
わかってる
んですよ



認知症の人は“何もわからない人”ではありません。
“本人なりの思いや願い、できる力を認めている人”です。
グループホーム 福寿荘で暮らす人々の、
生き生きとした心をスケッチしたドキュメンタリー。
「いのち」の息づかいに耳を澄ませてみてください。

(ヒューマンドキュメンタリー映画)

伊勢真一 映画作品

2015年/カラー/1時間25分

製作/いせフィルム <http://www.isefilm.com>

第2回 ヒューマン ドキュメンタリー 映画祭 「広小路」

平成 30 年

日時 9月17日 月 祝

開場 10:00 「ゆめのほとり」
上映 10:30
開場 13:00 「妻の病」
上映 13:30
15:00 ~ 伊勢監督をお迎えして
のトーク

会場 エリアなかいち
にぎわい交流館 AU (あう)
3F多目的ホール

〒010-0001 秋田県秋田市中通1丁目4 TEL: 018-853-1133
JR 秋田駅西口より徒歩7分 秋田中央交通バス千秋公園入口徒歩1分

秋田市平成 30 年度地域保健・福祉活動
推進事業補助金交付事業

当日券 「ゆめのほとり」「妻の病」

各一般 1,000円 中大学生 700円

1日券 「ゆめのほとり」「妻の病」の2本

各一般 1,500円 中大学生 1,000円

主催 ヒューマンドキュメンタリー映画祭「広小路」
を観る会

後援 秋田市、
秋田市社会福祉協議会、
秋田市手をつなぐ育成会

第2回 ヒューマンドキュメンタリー映画祭「広小路」

第2回を迎えて。もっとたくさんの人に見てほしい。

秋田市の真ん中でドキュメンタリー映画を観よう、と宣言した第1回上映会。パリでは仕事が終わってからカップルはスターウォーズを観るように、市中の映画館でドキュメンタリー作品を観て、夕食を楽しむと紹介しましたが、5月に台北で開かれた台湾国際ドキュメンタリー映画祭に「やさしくなめに」の上映で訪れた伊勢監督が驚いたこと。「何より印象的だったのは、この国ではドキュメンタリー映画に若者達がとても強い関心を寄せていることだった…客席の八割以上が、若い人達に埋めつくされており、我が日本のドキュメンタリー映画の八割方が、シルバー世代の観客層である現状を思い返さない訳には行かなかった。」
何故日本では若者達のドキュメンタリーへの関心が薄い

のでしょうか。まずはドキュメンタリー映画に触れる機会がないということ。秋田市などの地方都市ではなおのことです。見たら絶対に好きになれる筈と信じてこの映画祭を始めました。そして若者達に限らず、この国では社会全体が性急に答えを求め過ぎているのでは、と伊勢監督はつぶやきます。答えのわからないものを嫌い、二者択一で好きか嫌いかを問う。グーグル先生をポチッとするだけでなんでも解答が提示されるし、テレビのコメントーターはなんでもわかった風に、当たり障りのない言葉でしたり顔。「困ったことですね。」そう、困ったまま、何も変わることのない困った人たち。
私たちの生活は快刀乱麻に解が出ることなどそんなにはありません。頭をひねって考えて、それでも現実を前に戸

惑うことのなんと多いことか。そもそも人間は「考える輩」ではなかったか。ナイル河畔の強風に耐えて耐えて踏ん張る榎の木も、いずれは大自然の驚異に屈してポキンと折れてしまう。一方、賢明に自らの分をわきまえる「輩」は風が吹くと風に身をまかせてしなり、逆境のなかで一見屈服したように見えるものの、風がやむと、徐々に身を起こして再び何事もなかったようにもとの姿に戻って微風に揺れています。良いドキュメンタリー映画は見る人に答えなど要求しません。映画の中の一言や表情を持ち帰ってください。そしてなにかのはずみに意識の表面に浮かび上がった映画の記憶に思いを巡らしてください。私たちは「考える輩」です。



妻の病

—レビー小体型認知症—



誰の上にも起きる可能性のある“認知症”という病。愛する人が認知症になったとき、あるいは自分が認知症になったとき、一体何が大切なのか。

「まるで夢のようだね……」認知症の日々を生きる妻に、夫が語りかける。ふたりはうなずき合う。この映画は、認知症のドキュメンタリーというよりも、病を経て絆を深める、ある夫婦の愛の物語である。

—2011年3月11日。東日本大震災のその日、私はひとりの友人の話を聞くために、高知県南国市にいた。友人の名は石本浩市(62才)、ふるさとのその地で小児科を開業する医師である。十数年前、小児がんの子どものためのキャンプで出会い、10年がかりで「風のかたち」という映画を製作した仲間だ。その日、石本さんが語ったのは、

小児がんの話ではなかった。“レビー小体型認知症”それが、彼の妻の病名だった。

妻・石本弥生さんは、石本さんとは幼なじみ。50代から若年性の認知症となり、10年間、石本夫妻は病との闘いに明け暮れて来た。小児がん治療と地域医療の取り組み、妻・弥生さんの認知症との格闘、決してきれいごとでは片付けられない日々……。石本さんは、医師ならではの観察眼で、弥生さんの発症以来の日常を、まるでカルテを書くように、こと細かに記録していた。

認知症が進行し、今では身の回りのことがほとんど何

も出来なくなった弥生さん……。その弥生さんに深い愛情を寄せケアする石本さん、家族、親戚、地域の人々。映画「妻の病—レビー小体型認知症—」は、四国・南国市の豊かな自然に育まれ、支え合うように生きて来た一人の医師と、認知症の日々を生きる妻との、10年間に及ぶ“いのち”を巡る物語である。

「生きなきゃ……。ふたりで、よう頑張ったと思う」「うん、生きなきゃ」

伊勢真一

ゆめのほとり

—認知症グループホーム 福寿荘—

認知症の人は「何もわからない人」ではありません。何気ない一言やワンシーンに耳を澄ませてください。

映画「ゆめのほとり—認知症グループホーム 福寿荘—」は、北海道・札幌市のグループホーム福寿荘で共に暮らす人々を、2年間にわたって記録したドキュメンタリーです。映画は、重度・軽度さまざまな認知症の人々が、それぞれの日々を共に生きる姿を淡々と映し出します。

認知症の人は「何もわからない・できない人」ではありません。“本人なりの思いや願い・できる力を秘めている人”、“地域社会のなかで築いてきた暮らしや人生があり、今を生きている人”、“日々、喜怒哀楽を共にしながら、支え合っていくパートナー”です。

映画「妻の病—レビー小体型認知症—」(2014年製作)で、認知症の家族を夫婦愛の物語として描いた伊勢真一監督とそのスタッフが、グループホームを舞台に、一人ひとりの物語をスケッチした、穏やかで、静かで、優しいヒューマンドキュメンタリー。

本作は認知症についての説明等が殆どありません。「認知症」という病を見つめる以上に「人間」を見つめたいと思うからです。何気ない一言やワンシーンに耳を澄ませてください。観る人がそれぞれに深く思いを巡らせる映画として、受け止めてもらえたらと願っています。

演出
伊勢 真一
(いせ しんいち)

1949年東京生まれ。「奈緒ちゃん」「えんとこ」から「風のかたち」「大丈夫。」など長年にわたりヒューマンドキュメンタリー映画を中心に製作。様々な人の日常を温かい眼差しでほのぼのと映し出す作風で知られる。近作は「傍(かたわら)〜3月11日からの旅〜」(2012)、「小屋番 瀬沢ヒュッテの四季」(2013)、「シバ 絹文犬のゆめ」(2013)「いのちのかたち—画家・絵本作家 いせひでこ」(2016)「やさしくなめに〜奈緒ちゃんと家族の35年〜」(2017)など。2013年「日本映画ペンクラブ功労賞」受賞。2014年「シネマ夢倶楽部賞」受賞。

ヒューマンドキュメンタリー映画祭「広小路」を観る会は、エリアなかいち にぎわい交流館AU(あう)を会場として、レギュラー開催をしています。

第3回開催は2019年3月を予定しています。この映画祭を応援して下さる方を求めています。

あなたも「観る会」のメンバーに参加してみませんか。企業、個人のお力をお借りして、ご賛助をさせていただきます。

お問合せ：ヒューマンドキュメンタリー映画祭「広小路」を観る会
事務局 TEL: 090-3696-6880